
降り六つ輝石の欠片

緋炉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

降り六つ輝石の欠片

【Nコード】

N6818P

【作者名】

緋炉

【あらすじ】

突然ですが私、神楽坂 氷見は暴走車に轢かれて死んでしまったようです。

そして、「平凡な人生だったなあ・・・」と人生を振り返る余裕もなく、転生しました。しかもファンタジーな世界です。「これは楽しまないと損だよなあ」

平凡な生活を送っていた17歳の少女の転生物語です。完結出来るように頑張ります。

3月15日までに、第4話の表現内容など一部を修正しました。
大幅な修正ではないので読み直しをしなくても大丈夫です。

プロローグ：突然ですが……（前書き）

初投稿です。

妄想力がありますが、文章力があるかどうかは未知数です。とりあえず完結できるように頑張ります。

少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

今はまだ無いですが、残酷な描写や15禁と思われる描写が入る事があります。ご注意ください。ただし、入る場合は事前に記します。

誤字・脱字があれば教えて頂けると嬉しいです。

プロローグ：突然ですが……

私の1日の始まりは決まっている。

6時起床。私の家族は揃いもそろって朝が苦手のため、毎朝の食事とお弁当を作る。

6時45分。朝食・弁当を作り終わり、お父さんとお母さんを起こしにいく。ちなみに、2人とも中々起きないわ寝起きの機嫌は最悪だわでいつも苦勞する。しかし！何年も同じことを繰り返していたので自然とコツを掴んだ。ポイントは躊躇わずに一気に殺ること！（漢字間違いではありません）

「うゝッ！！あ、愛が痛いよ。ひいちゃん……」

「段々と威力が上がってきているのは気のせいかな？氷見」

今日も朝一番の仕事？を終え、キッチンで朝食を並べていると、お父さんとお母さんが2階から降りてきて開口一番に言った。

「……そんなこと言っても2人がちゃんと起きてくれないからでしょ。特にお母さんは一発で起こさないと私が殺られちゃうよ」

一回目覚まし時計顔に投げつけてきた癖に、と私は呆れ気味に言い

返す。それを聞いてお母さんは唸った。その時の私の顔の惨状や諸々のことを思い出したのだろう。下手したら虐待を疑われて児童相談所に通報されていたところだ（実際、病院では医師が最後まで虐待を疑っていた）。

「まあ、そんな事よりもう7時だよ。早く食べないと2人とも遅刻しちゃうよ」

私の言葉にお父さんとお母さんは慌てて食卓に着き、朝食を食べ始めた。今日は、弟は中学校が創立記念日で休み。おじいちゃんとおばあちゃんは一昨日から温泉旅行に行っており、かなり楽が出来た。いつもはもう少し早く起きて準備しなければならぬのだ。

「んぐんぐ・・・じゃあ、私はもう行くからね。食器は帰って来たらまとめて洗っちゃうから流しに置いておいてよ」

行つてらっしやーいという2人の言葉を背中に受け、梅雨が明けたばかりの空気を一身に浴びながら学校へ向けて出発した。

「あ！ひいちゃんお早うつ」

「朋ちゃん、おはー」

玄関を出たところで幼馴染の浅田 朋華とばったり出くわした。朋華の家は氷見の家の向かいなのだ。そして今更だが、この物語の主人公の名前は神楽坂 氷見と言う。氷に見ると書いて「ひみ」と読む。

「一緒に学校行こー」

朋華は癒し系小動物のような愛くるしい顔一杯に笑顔を載せて氷見を誘った。それに氷見は了承の意を返し、待たせては悪いと朋華のもとに急いだ。

キキイツ!!!!!!

「……………え？」

道路に出た所で身体に強い衝撃が走り、次いで浮遊感が私を襲った。
しかし、状況を把握する前に意識が闇に堕ちる。

最後に何処か遠くで誰かの叫び声が聞こえた気がした・・・・・・

転生したそうです。あ、両親は美形でした。（前書き）

2話目です。

私生活の合間の投稿なので、ペースはゆっくりになってしまいます。
目標は2日に1回の投稿です！！

転生したそうです。あ、両親は美形でした。

世界樹【オーリオール】を世界の中心に戴き、そこから北に精霊と妖精族が暮らす大陸・オーブ。東には大小様々な獣人族が暮らす大陸・リガート。南には魔物や魔人などの魔族が暮らす大陸・シン。そして最後に人族が暮らす西の大陸・フィーズ。

北・東・西は の字型に陸が続いており、国によつては頻繁に交流しているところもある。東の大陸は間に広大な海が広がっており、交流は限定的にしか行われておらず謎の大陸と言われている。

この世界は不穏な空気を孕みつつも絶妙なバランスでまだ表向きには平和を保っていた

世界共通の暦・ユグド暦2010年 ガット月12日の夕方。家々では夕飯の準備をする母親が忙しく動き、子供達はご飯の匂いに誘われて帰路につく。父親は仕事に疲れた体を引きずって、家族が待つ家へと急ぐ。

どこにでもある何でもない日常の一風景。その光景を自分の部屋の窓から見下ろす推定2歳の幼児。その顔に浮かぶのは憂いの表情で、僅か2歳（推定）の子供がするようなものではない。

「あうゝ（はぁー・・・やっぱり何度見てもファンタジー）」

可愛らしい声とは裏腹に、内なる声は成熟した人のそれであった。綺麗な銀髪に榛色の瞳を持った可愛らしい顔をした幼児の名前は、シルフィニア・ロンド。精霊族の母親と獣人狼族の父親を持つ種族ハーフである。しかし、母親の血の方が濃かったのか精霊族の特徴が顕著に表れている（なので、種族的には精霊族と言えなくもない）。その精霊族の1番の特徴と言えるのが銀髪である。そして、2番目の特徴は10歳の成人の儀を終えるまで子供は無性、つまり性別が決まっていないのである。しかし、これは純粋な精霊族の血を引く子供には決まって表れるものであるが、多種族の血が混じった場合は表れるかどうかは半分位の確率である。その代わりであるのか、髪色の方は、精霊族の血を引いていればその特徴が表れる確率の方が高い。

「あうゝ（しかも、何が一番ファンタジーって、私が赤ちゃんになっちゃってることだよねぇ・・・）」

そう。何を隠そうこの赤ちゃんことシルフィニア・ロンドは、21世紀の現代日本からやってきた女子高生・神楽坂 氷見なのである。世の中とは不思議なもので、あの日暴走車に引かれて死んだはずの（生まれてすぐに頑張っと思って出してみた）氷見が、時代どころか世界を違えて生まれ変わってきたのである。ライトノベルなどで俗に言う【転生】である。しかも種族まで変わっていて、さらに今後は性別まで変わってしまうかもしれないのだ。初めてそれを知った時には泣いた。それはもう体中の水分を出し切る勢いで泣いたのだ。勿論、それを見たワイルド系美形の父親とキレカワ美人な母親は育児初体験ということもあってかなり慌てていたのはまた別の話である。

「ん？シルフィどうした？」

「まあー！！？（おうッ！？びっくりしたな～お母さん）」

窓辺で黄昏れていて無防備だったところに突然声を掛けられてビクツと体が跳ねる。思わず声まで上げてしまい恥ずかしくなって、こちらの世界での母親であるユーリーン・ロンドの顔をまともに見れない。

もじもじと視線は下に体を動かしていると又も突然にユーリーンに抱き上げられる。そして、ギューツと強く抱きしめられた。

「ああー！！もう！シルフィは可愛いなあああー」

「ばううう！！？（え、え、何いきなり？！）」

氷見ことシルフィはその榛色の瞳を白黒させ、ユーリーンを見上げる。そして、思わず「愛しくて仕方ない」と言った慈愛に満ちた瞳と見つめ合ってしまった数秒固まる。それから、また視線を下げてもぞもぞと腕の中で動く。それをユーリーンはくすくすと微笑ましげに見つめていた。

この世界に生まれ落ちた当初はかなり混乱し、状況把握も何も出来なかった。少し落ち着いてきて現状を理解し始めると心の中を占めるのは、もう家族や友人には会えない悲しみとこの世界に一人であるような寂しさ。その気持ちは現実にも如実に表れていたようで、暗い顔をして元気の無い我が子のことをいつも心配していた両親に罪悪感が湧いてきたが、それでも前世の、神楽坂 氷見の記憶を持つて生まれてきてしまったのでどうしようもなかった。

だが、そんな日が何日も続き、氷見が新たにシルフィとしての人生を生きようと思ったきっかけは、根気強く彼女（無性だが）に話しかけ、惜しみない愛情を与えてくれた両親であった。元々、長く一

つのことを考え悩むことが苦手であつた氷見は『起こつたものはいやうがない。こんな経験二度と出来ないんだから楽しまなきゃ損だよね』と気持ちを切り替え、幼児生活を楽しんでいるのである。

しかし、楽しむとは言つたものの、あまりにも今までの生活（人とか生活の仕方とか文明とか）と違うので、時には黄昏れてみたくなるのである。今はまだ、幼児であるから外に出ることは出来ないが、早く自分の足で外を見てみたいものである。

「さ、そろそろジオも帰ってくるから2人でお出迎えしましょう。今日は、ナツの葉とグイルの肉で作ったスープだからね」

「あうあ！？（まじですか！？お母さん！！）」

こちらの世界の食事の中で一番の好物の名前を挙げられ、俄然テンションが上がるシルフィにユーリーンは笑いつつもホッとしていた。部屋に入ってきた時にしていた表情を見て、また生まれたばかりの頃のようになってしまうのかと危惧していたからだ。

そして、2人は良い匂い漂うキッチンに向かい部屋を出て行つた。

こんな感じだけど、毎日楽しくやっています。もう二度と会えることはないけど、皆も元気に過ごして下さい。

あ！私の新しい両親はワイルド系美形のへたれさんとキレカワ美人のクーデレさんでしたよ！！

転生したそうです。あ、両親は美形でした。（後書き）

誤字脱字がありましたら、どんどん教えて下さい（><）

絶賛幼児期満喫中　ここで少し情報整理します。（前書き）

あけましておめでとうございます。

年が明けました。今年もどうぞ宜しくお願いします。

久々に入ってみたら、お気に入り登録がされてあつてとても驚きました。

有難うございます！！

課題の一つが片付いたので3日ほどは連続投稿できると思います……早く話を進めたい……

2話目の矛盾を修正しました。

読み返さなくても問題ありません。

絶賛幼児期満喫中　ここで少し情報整理します。

皆さん、こんにちわ。

現代日本から異世界トリップ＆転生をしてしまった、元女子高生・神楽坂　氷見です。

先日、サンライ月3日に私は8歳になりました。早いもので私がこの世界に来てから、もう8年も経ったんですね・・・。（時間が経つのが早いと言わないで。自覚してます・・・orz）

ここで一旦、この世界の情報を整理しようかなと思います。

まず暦はユグド暦。

これは、この世界を創った創造主・ユグドライネの名前から付けられている。そして宗教もこの主神・ユグドライネを冠するユグド教が世界で一番大きい。これには種族や大陸は関係ないようだ（しかし、魔族の国であるシンは除く）。

次に日付や時間の形態は元いた世界と変わらなかった。違う点を挙げるなら、閏年が無いことと1カ月がきつちりと30日だけだという点である。そして月の読み方は・・・

ガット月（これが元の世界の月の1月に当たり、以降順に月に当てはまっていく）から始まり、ジス月・コラル月・クオーク月・ジエード月・サンライ月・リアン月・ニクス月・アイオ月・オーク月・シリン月・タイズ月となる。

次に種族だが、種族は大きく分けると人間・精霊族・獣人族・魔族・

神族の5つである。この中では人間が一番数が多く、神族が一番少ない。獣人族と魔族は人間の1／2割ほど少なく、精霊族は人間の半分ぐらいの数しかない。人間と神族は種族的に一種類しかないが、精霊族は妖精族・樹聖族・聖獣族と4つに分かれる。獣人族は、狼族・虎族・蛇族・蟲族・草族の5つに分けられ、魔族は魔獣と魔人の2つに分けられる。

そして、ここからがとても重要なことになる。

この世界には魔法があり、この世界に暮らす人達は全て平等に魔力を持って生まれてくる。しかしその魔力の量は平等ではなく、魔力が大きすぎて暴走させてしまう人がいれば、魔力を感知できるかどうかのギリギリの量しかない人もいる。

魔力の量というのは潜在的なものが多く、基本的に修行しようが悟りを開こうが量は変わらない（一部例外的に量が変化する者がいるが、それも何十年に1人いるかないからしい）。

だが、そんな魔力量が少ない者でも魔力を大量に消費する大きな魔術を行使することが出来る場合がある。

それが、【キララ＝キラ（輝石の子供）】の持つ輝石いしを使った魔術行使だ。

輝石とは、それ自体が属性を持ち、魔力を内包している石のことで見た目は宝石のようにキラキラと輝いている。輝石は、属性ごとに色が分かれており、水属性なら蒼玉・風属性なら翠玉・土属性なら黄玉・火属性なら紅玉・光属性なら石英玉・闇属性なら黒曜石という風になっている。形も大きさも持って生まれてくるキララ＝キラによって違い、内包している魔力量も違っている。つまり、魔力を多く内包している良質な輝石を持っていれば、自身の魔力と併せて大きな魔術も行使出来るのだ。魔力を多く内包している輝石は大きければいいというものではなく、属性色が強く出ており、また透明度も高いものが魔力を多く内包していると言われている。

さらに輝石は、その石が持っている属性の魔法しか使えず、輝石は1つにつき1属性しか持つ事が出来ない。しかし、輝石の中には使用者の意思によって属性を変えられ、また内包される魔力も他の属性輝石とは比べ物にならない程である（ちなみに、輝石に内包される魔力量はキララ⇨キラ自身の魔力量に左右されない）。

その輝石の名前は

【金剛石】

いまだその輝石を抱いて生まれてきたのは世界に2人しかいない、最強の石である。

あちらの世界ではダイヤモンドの名前で親しまれ高価だった、透明な宝石。面白い偶然であるが、あちらでも金剛石は世界で一番堅く最強な宝石と言われていた。

その輝石は1つ手に入れるだけで莫大な富を手に入れる事が出来ると言われているほどで、人々はその石を生み出す事が出来るキララ⇨キラを喉から手が出るほど欲している。また、金剛石だけでなく良質な輝石を生み出すキララ⇨キラはそれだけで多くの人々から狙われる存在だ。生まれたばかりのキララ⇨キラを拉致・誘拐するなどして金持ちなどに売買することは全大陸において珍しいことでもないらしい。

さて、ここまでが私が現時点で手に入れた情報です。本当はもっと細かい情報が欲しいんだけど、私はまだ8歳になったばかりなのであまり深く突っ込んで聞いて気味悪がられたり怪しまれたりしたら困る（っていうか嫌）なので、いまはまだ、聞ける範囲の情報しか

ないんですよ。

あ。今大陸で金剛石のキララ＝キラは1人だけで、何とかっていう獣人族の王様の第一妃らしいですよ。

あ でも、今はもう2人になったんだよね。
何か、私も輝石を持って生まれてきたんだよね。金剛石を。よりに
もよって金剛石を！！！！（大事なので2回言いますよ）

他の人達にばれたら、絶対確実に狙われる！

しかも、今は厄介な事情も抱えているって言うのに…………

私は現在8歳になったばかり。性別を決める成人の儀までに、男女
どちらかと交わってしまったら、男の場合は女に女の場合は男に性
別が決まってしまう、しかも一生離れられない契約が結ばれてしま
うんですよ…………orz

iiiiiiiiiiやあああああああつ！！！！！！ 心の
叫び

つていうか、何このトンデモ設定は（泣）

成人の儀が終わるまで、この平穏を壊さないで下さいね。神様！！

（あれ？実はそんなに満喫出来ないんじゃない？！）

絶賛幼児期満喫中 ここで少し情報整理します。 (後書き)

今回は下書き無しで書いてしまったので、読みにくい部分や矛盾点が出てくる恐れがありますっ(済みませんorz)
もし、発見しましたらお知らせください・・・。

お読みいただき有難うございます。

幼児も楽じゃないです・・・（前書き）

正月に更新が出来るかと思ったら、課題を一つ忘れてて・・・慌ててやりました。
どうにか間に合いました・・・

まだ不定期亀更新になりますorz

誤字脱字・文章に変な所があればご連絡頂けると嬉しいです。

幼児も楽じゃないです……

こんにちは。神楽坂 氷見ことシルフィ・ロンドです。

前回の情報整理の回で、あまり幼児期を満喫出来ていないことに気が付きました（遅っ）。

でも、美形な両親や威厳たっぷりだけど孫にはデレ甘なおじいちゃんとおばあちゃん、それに優しい村の人達に囲まれて私は幸せで一杯です。

リルデ村

精霊族が暮らすオーブ大陸の最西端に位置し、人間が暮らすフィーズ大陸に近く、人間が頻繁に通ることから、この村では精霊族と人間の両方の文化が入り混じっている。

村と呼ぶには活気が溢れているがそこまで規模が大きいということはない。人間との交流が頻繁になったのが約30年ほど前と最近の

事であるので、急激に村の規模を大きくする事は経済的に難しいと難色を示す人達が多かったため、未だ村と呼ばれるほどの大きさしかない。

リルデ村には行商も多く訪れ、村の中心にある通りは連日露天商などが並んで商売するので、人で溢れかえっている。子供は親と手を放すと迷子になる事必至である。

その通りを元気よく駆けて行く7〜9歳くらいの子供が4人いた。4人はお揃いで色違いの帽子を被っており、うち2人は肩より長い髪をリボンで一つにくくっている。残り2人は肩につかない程度の長さの髪である。4人の髪色は薄茶でさらさらしている。

「わぁー！！人が一杯だよ。すつごいなあ〜」

「うん。ここまで人が集まっているのを見るのは初めてだね」

「あ！あんまり先に行くとはくれるよ！？」

上から順にサイ、ユオ、ザイドである。3人ともシルフィと一番仲の良い友達である。サイは、本名をサイ＝ユギオンと言い、4人の中で1番髪が短くショートカットより少し長いくらいである。肌は少し黒めで瞳は焦げ茶色、また4人の中では1番背が高い。次にユオ＝フィッツ。髪が腰の中ほどまであり、今はオレンジ色のリボンで一つにくくっている。肌は白皙の白さを表しており、瞳は赤色で身長は4人の中では一番小さい。そして、ザイド＝エネル。肩より少し短い髪と瞳は海色で肌はユオよりも黄味がかった白色である（シルフィ的に一番日本人に近い肌色だと思っている）。身長はサイより1〜2？ほど低いが、彼らの年齢からするとサイもザイドも高身長の種類に入る。

会話からも分かるように、サイは好奇心旺盛で気の向くままに進むのですぐに迷子になり、ユオはそんなサイに引っ張られて進むので

迷子に巻き込まれる。ザイドは、そんな2人を諫めて方向転換させるお兄ちゃん的位置づけである。

そして、それを微笑ましそうに後ろから付いて歩いて行くのがシルフィである。4人とも精霊族だが、その特徴である銀髪は髻を着用して隠している。精霊族は数も他の種族に比べて少なく、容姿も端麗な者が多いので、こうして出掛ける時は髪を隠して、顔も見えないようにしているのである。そうしないと、人買いや奴隷商人に攫われて貴族などに売られてしまうからである。もちろん、全ての精霊族がそうしているのではなく、成人して、ある程度護身術を身に付けるなどした実力のある者は素の姿のままで外を歩いている。

4人はまだ成人の儀まで1、2年ほどあり、自分を守る術も身に付けていないので完全装備(?)でないとリルデ村への外出許可が下りないのだ。なぜ外出許可がリルデ村限定なのかと言うと、彼らが住む精霊族の村・セントブルーから近くて大きい村ないし街がリルデ村しかないのである。なので、シルフィ、ユオ、サイ、ザイドは時間があり、両親や長からの許可があればリルデ村へと遊びに来ていた。

しかし、今日はいつもより行き交う人が多く、大人の波に吞まれて進むのも一苦勞である。特に一番背が低いユオは一度大人に紛れると姿が見えなくなってしまうため、手を放さないよう細心の注意を払わなくてはならなかった。

ちなみに、シルフィを除く3人の容姿はずば抜けており、綺麗・神秘的・美形という言葉がぴったりと当て嵌まる。シルフィも綺麗と言われる容姿をしているが、3人ほどではない。

「今日は村の広場に行こうぜ！この間の調唄うたうたいがあるかもしれないしっ」

「あ！それ良いかも。『こじゅつえいゆうたん古述英雄譚』の続きが聞きたい！」

サイの提案にシルフィが同意を示す。そして残りの2人を振り返ると頷きが返ってきたので、4人は早速村の中央に位置する広場に向かって走り出した。

リルデ村 中央噴水広場

ここは人々の憩いの場となっており、定期的に大道芸などを行う旅の一座がショーをしたり、吟遊詩人などが弾き語りを行っている。4人が目的としている調唄いも吟遊詩人の一種である。最近村に來たばかりで、美人で綺麗な声をしていると評判な調唄いである。

広場に着くと、すでに人だかりが出来ていた。シルフィ達は子供特有の小さい体を生かして、隙間をすり抜けて前に進んでいく。一番前まで来た4人の目に、噴水の縁に腰かけた灰色の長髪を後ろに流した幼くも綺麗な顔をした女性の姿が飛び込んできた。彼女の手にはハープを小さくしたような楽器が握られており、シルフィの前の世界で言う岩場で唄う人魚のような幻想的な姿だった。ただ残念なのは瞳を閉じているので、あの綺麗な新緑のような翠が見れなかったことだ。

丁度今から唄い始めるらしく、4人は他の人達と同じように静かに
詞が始まる時を待つ。

暫くすると、彼女が口を開き詞が紡がれる。

これは猛き白き者と哀しき黒き者のはなし

地上にて多くの神々と人が交流せし時代

彼の者 異世界より来たりし黒き者

神聖帝国の精霊姫に導かれ

強大な力を持ちて この大地に降り立たん

神聖帝国の神子姫 彼の者の姿を見て魔の者と断じる

神聖帝国と神子姫 天上神の力をかりて終焉の大地に追い立てん

神聖帝国と精霊姫これに抗う 彼の者の力凄まじく神聖帝国と神子
姫これに為す術無し

神子姫 天上神と大神子の助けを得て遠き地より白き者を喚び出さん

白き者 その強大な力を持ちて 彼の者を封じる

黒き者を封じし終焉の大地 魔の物集いて黒き者と共に眠る

白き者、黒き者が再び目覚めぬよう　黒き者に加担せし精霊姫を使い封印の楔を大地に打つ

楔の名オーリ・オール

オーリ・オール外れし時　黒き者再び目醒めこの世界を破滅へと導かん

譚が終わり、楽器の余韻が消えると人々は拍手喝采で少女の前に置いてある箱に路銀を投げ入れていく。中にはリクエストやアンコールを強請る者もあり、ちょっとした騒ぎになっていた。シルフィ達4人も箱に路銀を入れてからその場を離れる。はぐれないように4人手を繋いでいた。

「すごく綺麗な声だったね」

ユオが興奮したように話す。サイとザイドも同意するように刻々と頷く。しかし、シルフィは唄声の綺麗さより内容の方が気になっていた。

《異世界から喚ぶって・・・もしかしてあのラノベとかでテンプレの召喚術ってやつ？え、まさかの異世界っていうのは私が元居た世界だったり・・・??》

自分の考えを少し突飛かな?と思いつつ、シルフィは他の3人の会話に時々加わりながら、あの譚唄いが唄った内容をもっと詳しく知ることが出来ないかと考えにふけていた。

幼児も楽じゃないです・・・（後書き）

読んで頂き有難うございます。

中途半端で済みません；；

2011年3月12日 加筆修正

早く次話投稿できるよう頑張ります！

古述英雄譚について調べてみましたが・・・・・・・・（前書き）

読んで頂き、有難うございます。

2ヶ月の放置申し訳ありませんorz

次話は金曜までに更新したいと思います。

不定期&亀更新で済みません；；

誤字脱字などがあればお知らせください！

古述英雄譚について調べてみましたが・・・・・・・・

リルデ村を訪れてから数日が経った。

訶唄いの唄を聴いてから、いつも行く屋台でラキシシュ（クレープに似たもの）を買って、それを食べながら村を一周した。やはり人がいつもより多かったため、一度はユオと逸れてしまった。しかし、「逸れた時は此处に集合！」と決めていた建物に行けばすぐに再会する事ができた。

一通り村を回って遊んだら、もう辺りは薄暗くなっていた。リルデ村で露天商は片づけに働きに出ていた男性や遊んでいた子供は家に帰り始めていた。

その前世で言う帰宅ラッシュの中を4人で駆け抜けて帰宅の途に着いた。予定より少し遅れての帰宅だったため、家に着いてすぐに怒られたのは苦い記憶だ。

シルフィは家の手伝いや勉強の合間に、この間訶唄いが唄っていた『古述英雄譚』（こじゅつえいゆうたん）について詳しく調べる事が出来ないか色々と模索していた。しかし、今の所有益な手掛かりは掴めていない。

「（はあ・・・・・・・・）やっぱりそう簡単にはいかないか」

落胆が色濃く出た顔を隠そうともせず、シルフィは家にある書物庫から外に向かった。書物庫とは言ってもそこまで広くはなく畳4畳分位しかない。そんな部屋に詰め込めるだけ詰め込んだ書物たちはいつ崩れてもおかしくない程うず高く積み上がっており、書物を読んでもいつ倒れてくるかハラハラドキドキしっぱなしであった。しかし、2日かけて読破したシルフィだが、そこに古述英雄譚に関する有益な情報は見つからなかったのだ。今の落胆振りもいた仕方

ないというものである。例え歳相応ではなくとも今回は見逃して頂きたい。

《この世界では黒って魔の者が纏う色って言われてるんだよねえ》
・まんまラノベのテンプレだね。しかも異世界で黒って言えば日本人っぽい？でもその後に出てくる白い人ってどこの出身よ？こっちもテンプレ的に属性魔力が光だったからとか安易な考えからだったりして・・・》

それも大いに有り得そうだと苦笑するしかなかった。結局今の段階では推論の域を出ないが、もしこの推論が真実であった場合、その黒き者は魔の者が住む大陸・シンに封じられているのだ。

そしてその封印を成し得ているのがこの世界の大陸の中心地にあるオーリ・オールなのだ。

しかもこれは只の御伽噺おとぎばなしではなく、史実に基づいて創られており、その時の事は記録水晶（声や映像を記録しておくもの。ビデオカメラの魔法版のようなものだ）に記録されているらしい。しかもどういう原理かは分からないが、それは何千、何万年と経った今でも色褪せることなく声と映像を記録し留めている。

前世ではそれなりにファンタジー小説等を読んでいたことのあるシルフィからしてみればお決まりとも云える展開であったが、第三者のな位置から読む分にはいいが、実際にそれが身近（といっても過去の出来事であり体験したわけではないが）にあるというのは何とも気分が悪かった。

封印の楔であるオーリ・オールにも黒き者に加担したと言われている精霊姫と言う人が使われているのだ。まるで人身御供か人柱のようだと思惑を抱いてしまった。

そのお陰で今の平穏があるのだが・・・そこは前世の記憶がある弊害と云おうか。どんなにこちらの生活に慣れたといってもこれば

かりはどうにもならないと思った。

確かに前世においても過去には豊作や、自然災害を神の怒りとしてそれを鎮める為に村の若い生娘を生贄として神に捧げたりしていたようだが、それはすでに過去の出来事であって現代日本でそういったことをしたならば厳しい批判やバッシングの的になっているだろう。さらには、警察に捕まり、法で罰せられるのは必至である。

しかしこの世界では、そういったことが当たり前として傍にあった。シルフィはまだ現代日本人としての感覚が強く、そういったことに慣れていないし慣れたいとも思っていないかった。

「（まあ、今はそんな事を言ってもしょうがないんだけど・・・）とりあえず、後ちよつとで成人の儀だし、それまで何も起こらないといいなあ。」

因みに成人の儀は11歳〜12歳の間で行われる。成人の儀は、性別が変化するという事もあり、肉体的にも精神的にもかなり負担がかかるものらしい。そのため個人の成長速度等も加味して決められ、皆で一斉に行うという事はあまりないらしい。しかし、今の状態であると、シルフィ・ユオ・サイ・ザードの4人は一緒に成人の儀を迎えられるとの事であった。

現在8歳のシルフィ達は、3年後のタイズ月に成人の儀を行う予定である。これは確定ではなく、状況によって変動するらしい。何もなければ予定通り行われると昨日おじいちゃんが言っていた。

「何もなければ」って言われると何か起こる前兆なんじゃないかって思っちゃうのは私だけかしら？」

とりあえず成人の儀が終わるまで何もない事を神様に真剣に祈っておこうと固く決意しました！

まあ・・・そう言っても結局は“何か”は起こるんですけどね！（号泣）
だってそれがテンプレですからッ！！！！

古述英雄譚について調べてみましたが・・・・・・・・（後書き）

3月16日 ジルコ月 タイズ月に修正

成人の儀までの彼は？～半年前～（前書き）

何とか仕上げられました。

次話は明日も投稿出来たらいいなという感じです。明日出来なければ、24日辺りになりそうです。

昨日初めてアクセス数を見て、こんなに読んで下さっているんだと驚きました。

凄く嬉しいです！

読んで頂き有難うございます。

成人の儀までの彼は？半年前

こじゅつえいゆたん

古述英雄譚について調べ始めてから3年程が経った。

未だに進展もない現状にやきもきしつつ、先月ジエード月の29日に8歳だったシルフィは11歳になった。成人の儀まであと半年となった今日この頃（現在はサンライ月の7日で成人の儀はタイズ月の18日に行われる予定である）。

成人の儀が間近となったため、シルフィ・サイ・ユオ・ザイドの4人はそれなりにバタバタと忙しい1日を送っていた。

というのも、精霊族の成人の儀では、この世界の創造神であるユグドライネに対して祈る祈りの言葉　通称：祈歌きかと言われているものを複雑な動きに合わせて紡ぐという習わしがあるのだ。しかも、その動きというのが1人なら1人用の、2人なら2人用のといった成人の儀を行う人数に合わせて違ってくるのである。

今回成人の儀を行うのは、シルフィ達4人を含めた7人と人数が多いので（今回成人の儀を見送ったのは5人とこちらも多い）、1人1人それぞれの役割である動きを完璧に覚えたとしても、それを合わせて一つの動きにしようとするのは中々根気のいる作業であった。

因みに、成人の儀でどのようにして性別を決めるかというと・・・

・これは創造主であるユグドライネに祈歌を紡ぎ、それを聞いたユグドライネが祈歌を紡いでいる者を1人1人視てその者に合った性別を与えるらしい。そして、成人の儀を終えた者は、一晩かけて徐々に身体が変化し、太陽が昇る頃には完全に身体が出来上がっているようである。

しかし、過去の文献の中にはユグドライネが性別を決めかねて、両性であった者もいたようである。これは死ぬまで両性のままなので

はなく、成人の儀が終わって生活していく中で、何年もかけて徐々に片方の性が強く顕れて最終的にはどちらか一方の性に落ち着くらしい。

また、両性となった者は不便な思いをするが、それを申し訳なく思ったのかどうかは定かではないが、ユグドライネから【祝福】という形で何らかの恩恵を受けるらしいのである。それが何であるのかは分からないが、噂では強い魔力や最強の身体能力、失われて久しい古述魔法の一部等といった他人にばれれば拉致フラグが立ちそうなものであるらしい。

実際には、性別が決まっていないう無性の状態であっても、個人の性格や気性、顔の造形等からある程度どちらの性になるかは判別できるらしい。なので両性というのは滅多に顕れないようである。文献に載っていた両性についての記述も、過去には5人しか両性となった者はいなかったらしい。さらに、その両性となった5人も成人の儀から10年以内には、性別が決まっているようである。

「だから心配する事は何もない。成人の儀は無事に終わるよ。」

その話を成人の儀で行う動き 通称：舞祈ぶきと言われているものを7人全員で練習している合間にシルフィの父であるジオラ

ルド・ロンドは、成人の儀について話し終えると、不安そうにしているシルフィ達に向かって安心させるように微笑んで言った。普段、滅多に表情を動かす事が無い彼の優しい微笑みに、実子であるはずのシルフィも顔を赤く染めた。そして心の中で「お母様も、お父様のこの表情かおにやられたんだな」と確信した。それ位、彼の微笑みは威力抜群だったのである。さらに、こうも思った、「お父様は無自覚天然たらしだ！」と。

ジオラルドの話が終わってから暫くして、また練習を開始し、ある程度動きが合ってきたところで今日の練習は終了した。

明日は全員での練習はなく、午前中は個々で祈歌の練習をする事になり、午後からはシルフィ達4人は集まってセントブルー村の近くにある森の中の湖でピクニックをする事になったのである。久々の休暇なので、特にサイがウキウキとテンションが高い様子で、それを落ち着ける為に言ったザイードの言葉にテンションをどん底まで落とされるという姿が見られた。それをシルフィとユオが苦笑しながら見守り、ピクニックに持っていくお弁当の中身は何かを話していた。

「それじゃあ、また明日ね！」

シルフィの言葉に返事を返し、それぞれ美味しい匂い誘われるように家に帰って行った。

成人の儀までの彼は？半年前（後書き）

短くて済みません；；

感想&誤字脱字大歓迎です！

成人の儀までの彼は？　3ヶ月前　（前書き）

こんにちは。

読んで頂き有難うございます。

何とか今日に次話を投稿できました。
楽しんで頂けたら幸いです。

成人の儀までの彼は？ 3ヶ月前

成人の儀まで残り3ヶ月となった今日この頃……皆さんいかがお過ごしでしょうか？

私達は毎日毎日、ほろろじきん襷袢雑巾のようになりながら成人の儀を成功させるために頑張っていますよ……ええ……モチロンガンバッティマスヨ（遠い目）

「えっと……シルフィちゃん大丈夫？」

ユオが明後日の方向を向いて遠い目をしながら何かに語りかける姿を見て、恐る恐るシルフィに声をかけてきた。そんなユオに、シルフィは苦笑しながら「大丈夫だよ。」と返した。

成人の儀の為に練習を重ねて大分日が経つが、未だに一度も成功していない事が一つだけあった。

「……難しすぎるのよー（泣）精霊族の古代語って舌噛んじやいそうになるよ。」

「ふふ。でも儀式の最初の【口上】と最後の【締め】には絶対に必要な事だし。それにシルフィちゃんは古代語が分らないんじゃないかな。頑張って発音が出来てないってだけなんだから、もうちょっと頑張ろうよ。」

「そうそう。発音はまだ僕達だってあんまり上手く出来ないんだか

ら、そう悲観する事もないと思うよ？……一番危ないのは、古代語を理解できないサイだよ。」

ユオとザイドに慰められながら件の『一番やばい』サイの方に視線を向けると、某アニメ漫画の主人公のように白く燃え尽きていた。そう。成人の儀の一番の難所とも言われる【口上】と【締め】の精霊族に伝わる古代語の発音が何度言っても成功しないので焦っているのである。因みに、古代語を見てそれを現在の言葉に訳すのはそこまで難しくなかったのだが（約1名はそこで躓いている）、それを声に出して読むとなると、発音が難解すぎて上手くいかないのである。

実は、この事を知らされたのは7人での舞祈^{ぶき}が初めて成功した2日後であつた。初めて聞いた時は寝耳に水でかなり驚いた。それから、今回成人の儀に参加する全員が一心不乱に精霊族の古代語と格闘しているのである。

「むう〜」？

？ ？ ？ ？ ？

？

？

？

？

？

μ ？ 『は

何とか言えるようになったけど……」

「それだけでも進歩じゃないか。僕はまだそこまで完璧に発音できないよ。」

うんうんと唸るシルフィにザイドが苦笑しながら応えた。

この古代語は成人の儀以外では使う事があまりないので（極稀に公の儀式の場でユグドライネに語りかける時に使う事があるが）、大抵の精霊族の者は、成人の儀の一回限りなのである。そう考えるとまだましかーと気持ちを入れ替えたシルフィはまた古代語と読み方が書いてある紙と格闘しだした。

それを見たザイドは「じゃあ僕も頑張ろうかな。」と言って、シ

ルフィが持っているのと同じ紙に視線を落とした。その際に、チラツとサイの方を見ると燃え尽きたサイを必死に慰めるユオの姿が見えた。それに呆れを含んだ苦笑を溢しながら、古代語に集中している。

成人の儀まであと3ヶ月あるとは言え、それまでにこの古代語を完璧に発音できるかと言えば、ここにいる誰もが首を横に振るだろう。実はそれだけ切迫した状況なのだが、それでも自分の事より他人^{サイ}を慰める事を優先しているユオは優しいというよりお人好しと言えるだろう。

ユオの必死の慰めにもノロノロとしか反応を返さないサイを見たザイドは嘆息して椅子から立ち上がる。そして、サイの後ろに回るとその頭を思いつき殴った。その時「ゴンツ！」と凄くいい音を聞いた周りのシルフィ達は無意識の内に手で頭を押さえた。

「いい加減ウジウジウジ鬱陶しいよ？ユオだってまだ覚えなきゃならない事が沢山あるんだから、サイに構ってる時間なんて本当はないんだよ。それなのに今！サイを！優先してるんだよ！？申し訳ないとか情けないとか思わないわけ？」

「……………っだつてさあ！」

「だって明後日もない！つべこべ言わずにさっさとやれっ！！」

ザイドはもう一発サイの頭を殴って少しすつきりしたのか、爽やかな笑顔を浮かべていた。そしてその笑顔のままユオに自分の事をするように促す。ユオは小さく苦笑して、サイから離れるとシルフィの前の椅子に座って古代語を読み始めた。

その姿にザイドも満足げに微笑み、もう一度サイに視線（という名の一睨み）をやるとシルフィの横に座った。ザイドが座る時にシルフィは彼と目が合ったので笑いながら「流石お兄ちゃん。」と言葉をかける。

実はこの4人の中ではザイードの誕生日が一番早く、ユオが一番遅い。サイとシルフィは同じ月で日にちはサイの方が早い。その為かザイードは凄く面倒見がいい（と言うより兄貴肌）のだ。

「本当、手のかかる弟妹だよ。お母さんは放任主義だし？」

「え?! お姉ちゃん通り越してお母さん？」

「シルフィは僕のお姉ちゃん像に当て嵌まらないよ。」

くすくすと笑いながら古代語に視線を落としたザイードに倣いシルフィも古代語を覚える為に集中する。本当はもっと言いたい事があったが今は古代語を覚えなければならぬので、それらの言葉を飲み込んだ。

成人の儀まであと3ヶ月

成功するかどうかは実はサイの古代語にかかっているのではないかと、サイ以外の6人全員が思った日だった。

成人の儀までの彼是？〜3ヶ月前〜（後書き）

感想&誤字脱字大歓迎です！

今回の話の中で出てくる精霊族の古代語は、グーグル翻訳で検索したギリシャ語を使用しています。異世界の言葉と言うのが上手く思いつかなかったので・・・済みません；；；

今後もそちらを使用しようと思っているので、それについてのご意見等もありましたら宜しくお願いします。

成人の儀までの彼は？～人間側～（前書き）

お久しぶりです……

読んで頂き有難うございます。

間が空いてしまって済みませんorz

成人の儀までの彼は？～人間側～

人間族が住む大陸・フィーズ

その大陸で精霊族等が住むオーブ大陸が最も近い所にある国の城の中。

白亜の巨城というに相応しい城の周りは段々畑のような土地が広がっている。城に一番近いのは国の重臣や有力貴族の住居である屋敷が建っており、一段下がった場所には中小貴族の屋敷と貴族御用達の高級店、その下には一般庶民の住居と商店や市場が建っている。そして、城から最も遠い土地は低層民街となっており、低所得者や奴隷、亜人種等が住んでいる。その、ギリギリ低層民を囲い込んでいるのが城と同じ材質の石を使って建てられた堅固な外壁なのである。しかもその外壁には、大小様々なキララ^{スラム}キラ（輝石の子供）の黄玉（土属性）が埋め込まれており、ちよつとやそつとの攻撃では崩れない造りになっている。城の周りを囲っている城壁も堅固な造りとなっているが、それよりも堅い強度を誇っているのがこの外壁なのである。

この国の主な産業は輝石^{いし}の生産と医療である。城の西側にある広大な森には豊富な薬草が年中枯れることなく群生しており、身分等に関係なく年齢によって教育を施すように法によって制定しているこの国では、15歳以上の者なら一般的な薬草なら見分ける事や煎じて薬を精製することが出来る。

これは、6代前の国王が立案・制定した事で、これにより他国からは考えられないくらいの識字率を誇っている。『学は時にはどんな

武器にも勝る』とは、当時の国王・カーネリアンⅡガット・ドウⅡドゥリアラスが言った言葉で、その当時は領土や覇権争いが盛んで、3日と空けずに必ず何処かで戦争があるような時代であった。そんな中、武闘派でもあり学にも明るかったカーネリアンⅡガット・ドウⅡドゥリアラスは戦争による自国の惨状を見て、戦争が如何に無意味であるかに気付き、即日に自国周辺で起こっていた戦争を終わらせ、復興を目指した。

その時に、国を豊かにするのは武ではなく学であると考え、学費等は国が保障するとして、国民に18歳以下の子供を学校に通わせるように促したのである。初めは反対もあったが一般市民や低層民からも優秀な者が出てくるなど徐々に成果も出始め、その者達が政治や商業等の分野で頭角を現した事もあり、時間をかけてその政策は周囲の人間に認められていった。

そしてこの国のもう一つの産業である輝石いしの生産とは、この国のキラⅡキラ（輝石の子供）の出生率が非常に高く、外壁にふんだんに使われている黄玉も自国の子供達からの提供によるものだ。なぜ、この国におけるキラⅡキラ（輝石の子供）の出生率が高いのかは解明されていないが（他国からこの国に移住してきた人も出生率が高いからだ）、精霊族等が住むオーブ大陸に近いからではないかと言われている。

自国の国民はこの国と王侯貴族を誇りに思い、他国民からは羨まれていると共にその勢いを恐れられている。

その国の名前は

メイザ・ドゥリアラス

別名『神に祝福を与えられし国』と言われている。

そんなメイザ・ドゥリアラスの象徴である白亜の城・ドゥーラン城

の一室では3人の男が重苦しい空気の中話し合っていた。

広い室内の真ん中には、重厚な楕円形の形をしたテーブルが置いてあり、上座には壮年の男性が座っていた。ロマンスグレーの髪を後ろに撫でつけ、歳を感じさせないがっしりと鍛えられた身体は他者を圧倒させる貫禄が感じられる。若い頃はさぞ数多の女性を虜にしたであろう、歳をとつても衰える事のない寧ろ大人の男の渋さを滲ませている秀麗な顔立ちの美丈夫は名前をウイリシアル・ベイ・ドゥーサ・ドゥリアラスと言い、メイザ・ドゥリアラスの第27代国王である。

そして、彼の隣にいるのはウイリシアルとよく似た顔立ちの、これまた現在進行形で多くの女性を虜にしていそうなチョコレート色の瞳の美青年であった。ダークグレーの髪をウルフカットにしており、後ろは肩より5?程の長さがある。鍛えている身体はがっしりと、しかし余分な筋肉は付いておらず見た目はすらつとした細身である。彼の名前はヘリオトロップ・ベイ・ドゥーサ・ドゥリアラスと言ってこの国の第1王子である。父親であるウイリシアルは濃紺の、上着が腰より少し長い軍服のような形の服を着ている。上着の中は白いシャツに黒いネクタイをし、上着の上からこれまた黒い太めのベルトを巻いているおり、肩から赤いマントを付けている。因みに、靴は黒いブーツである。ヘリオトロップもマントはしていないが、同じ形の服と靴を着ているが、こちらは少し光沢のある黒色である。また、ウイリシアルはたれ目だがヘリオトロップはややつり上がった形の目をしているのできつく見られがちだが、瞳がチョコレート色をしていることによって「寧ろそこがいいのっ!!」と豪語するお嬢さん方が多数いる。

そんな2人の正面に座っているのは、耳に掛かる位の栗色の髪と同色の理知的な瞳をしたこれまたヘリオトロップと同じぐらいの美青年である。彼の名前は、アイオライト・トゥール・ス・バレッタと言いメイザ・ドゥリアラスでも有数の上流貴族であるバレッタ家の

次男であり、王大使直属近衛騎士団隊長をしている。ヘリオトロープとは乳兄弟で幼馴染という気心の知れた間柄である。公の場では、お互いの立場を理解しているので、それに合った態度を取っているが、普段は掴み合いの喧嘩もするし、言葉遣いもとてもフランクなものになる。

彼の格好は、他の2人と異なり踝^{くるぶし}まであるロングコートのような形の上着の新緑の軍服で、肩から続く黒く太いベルトを腰に巻いており、そこにレイピアより少し太い剣を腰に佩^はいている。そして、二の腕には近衛騎士団である事を表す双頭の獅子のマークが刺繍されている。

「……で、最近我が国の国境付近で不穏な動きがあると報告が上がっていたが、調査の方は進んでいるのか？」

「現在、国境付近にある村や町に隠密を送り込んでいますが、あまり効果はありませんね。……ただ、妙な噂が出回っているようですが」

ウィリシアルの質問にアイオライトは難しい顔で答えた。手元にある資料は隠密から上がってくる情報を纏めたものだが、それにさっと目を通すとある一文で目が止まる。

ノースヴィカド

「何でも神の恵みが届かない地が強硬手段に出るようです。多額の懸賞金をかけてまだ成人の儀を受けていない精霊族を捕獲するように促しています。懸賞金に目が眩んだ多くの冒険者がオーブ大陸に向かっています。この国は一番オーブ大陸に近いので、最近の国境付近の不穏な動きはそれではないかと思われます。」

「まだ成人もしていない精霊族を捕まえてあいつらは何をしようとしているんだ？」

アイオライトの報告にヘリオトロープ疑問の声を投げかける。それ

に対してアイオライトは「これはあまり知られていない事ですが・
・」と前置きしてから話し始めた。

「彼ら、精霊族は成人の儀を終えるまでは性別が無い無性の状態で、その状態で合意、非合意関わらず性交に及べば相手に一生縛られる一種の主従契約のようなものが結ばれてしまうようです。しかも、それはどちらかが死ぬまで解けないらしいです。」

「成る程……つまり相手を無理やり犯して、一生を彼の国の為に働かせようと言う魂胆か。精霊族は最も大地の神に近い種族と言われているしな。」

「ええ……また神族に次いで創造主ユグドライネに近い種族でもあります。彼らには独自の方法でユグドライネから恩恵を受けていると言われています。彼の国の奴等もそこに目を付けたんでしょう。」

そうしてアイオライトは瞳を伏せる。再び沈黙が支配した室内でヘリオトロープは背後の窓から見える広大な森に目を向けた。この広大な森を抜けた先に精霊族が住むオーブ大陸への入口がある。

「アイオライトよ。引き続き国境付近に警戒態勢を敷き、オーブ大陸への入口を最も警戒しろ。また、精霊族の子供が下りてくる可能性のある村に巡回兵を配置しろ。」

ウィリシアルの貫禄溢れる声と命令に椅子から立ち上がったアイオライトは、簡易の礼を返すと急いで部屋を出ていった。これから人員の配置や巡回コースの決定、村長への通達などしなければならぬ事は山ほどあるのだ。

「リオ。お前は一番精霊族がいる可能性のあるリルデ村に向かえ。精霊族の成人の儀は決まった日程では行っていないかったが……何か嫌な予感がする。」

「 分かりました。それでは暫くの間城を留守にします。
アイオライトは連れて行きますが、アイオニアは念の為残しておきますので・・・」

そして、ヘリオトロップは父王の前を辞し、城を留守にするにあたって片づけなければならない書類を捌く為に自身の執務室に向かって歩き出した。

吐く息が白くなり始め、本格的に冬が始まろうとしているシリム月の出来事であった

成人の儀までの彼是？～人間側～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

今回は初の人間サイドの話です。今までで一番長くなっていました（あれ？）

連絡

来月から新社会人となるので、色々準備や研修等で更新は出来る時だけという状態になってしまいます。

なるべく今月中に書ける所まで書いてしまいたいのですが、何分遅筆なのでどこまで書けるか分かりません。

しかし、最低月2は更新したいと思っています。なので、今後もうぞ宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6818p/>

降り六つ輝石の欠片

2011年8月9日23時38分発行